
ハリー・ポッターと非力な兄君の人生

松竹梅秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリー・ポッターと非力な兄君の人生

【Nコード】

N0638V

【作者名】

松竹梅秋

【あらすじ】

死んだと思っただけ、でも生きてた。そしてハリー・ポッターの兄だった。でも、すぐに社会的にハリーの兄は葬り去られた。俺は俺として生きてほしいとダンブルドアが言った。俺の望みは何？

7・24一話から四話まで修正完了しました。一度読んでいた方、すみません。大筋は変わっていませんが、三話と四話は倍ぐらいの長さになりました。一話と二話は数字とニュアンスが変わ

った程度なので読み直さなくても大丈夫だと思います。

俺と新たな人生の始まり（前書き）

7・21 誤文訂正
7・24 加筆修正

俺と新たな人生の始まり

死んだ！

そうだ、俺は死んだのだ！

あまりにもあっけない死だったように思えるが、そんな事はどうでも良い。

何故、俺は生きているんだ？

何故、俺は赤ん坊なんだ？

俺は叫んだ。

なにやら騒がしい。

目覚めてみるとやはり俺は赤ん坊で、その汚れを知らぬ小さな手をそっと見つめた。

現実是不変ならない。

「あら、起きたの？」

あうう、という締めりのない返事をする。

すると、花がほころんだような笑みを返してきた赤毛の女性はおそらく俺の母親だ。

「え、起きたって？おい！僕の子が起きたぞ！」

黒髪のお眼鏡をかけた青年が誰かに知らせた。

身体が赤子だからであろうか、単純な思考しか出来ない・・・

「お前の子供だとは思えないくらいかわいいなこの子。」

後から来た男性??こちら黒髪、ただし眼鏡をかけていない??
が覗き込んでくる。顔が近い!そんなに強く頬をつつつくな!!

「抱いてみても良いかい?」

鳶色の髪がやってきた。

「いいよ、リーマス。でもその前に、君が彼の名付け親だ。綺麗な赤い髪を毛をしている・・・先に僕の子に名前を付けて欲しい。」

はじけた感じとは違って変わって、父がリーマスに語りかけた。

「ああ、この子の名前はロイドだ。ロイド・ポッターに祝福あれ。」

やさしく抱き上げられる。

ああ、俺は死んでまた生まれたんだなって思った。

「俺も名前つけたかった。」

「シリウスは黒髪の男の子、赤い髪の男の子だったらリーマスで黒い髪の女の子なら私の友達が名前つけるって約束でしょ?ロイドってすてきな名前じゃない。」

「赤い髪の女の子だったら僕がつけるはずだったのになあ。」

いつの間に来たのか小柄な男が俺の頬をつつついている。止めてくれ。

「まあ、二人目の子供が生まれるまで持ち越しさ！」

父がそう締めくくった。

俺の名前を付けた人はリーマス

黒髪のハンサムさんはシリウス

小柄な男はピーターで、

父の名前はジェームズ、母の名前はリリー

これはもうチェックメイトだろう。

間違いなくハリー・ポッターの世界だ。

ロイド・ポッターなんて出て来ないはずだ。

ああ、ヴォルデモートに襲撃されるときに殺されるのかな？

幼すぎる身体は自由に動かす事が出来ない。

起きている短い時間は赤子らしくしていたり（身体に精神が引つ張られていないのか理性ではなんて事無いと思っっている事もなんだか無性に面白く感じられた）、考え事したりしていた。また死ぬのかな俺。

俺の起きている時間は天井をカラフルに染め挙げたり、クマの人形に抱きつくとクマも抱き返してくるとかいう、かわいいいたずらを仕掛けている父を何となく尊敬してみる。

シリウス曰く、俺が生まれてから悪戯が乙女チックになったらしい。生まれて初めての誕生日には皆がやってきて、いろんなプレゼントをくれたし、ハロウインのときは俺が仮装させられて、写真撮影会みたいになった。

母の作るケーキは最高だ。

バースデーケーキのホイップはお菓子屋さんと変わらないぐらいにきめ細やかだし、パンプキンケーキの甘い匂いは心を弾ませる。

ピーターは市販のお菓子をたくさんもってきてくれるし、リーマスはそのお菓子をつまみつつ家を華やかに飾り付けてゆく。

父とシリウスは飾り付けに魔法を掛けておもしろおかしくして遊んでる。

母と父が買い物に行つて、シリウスが面倒を見てくれた事もある。普通の子供だったら両親と離れると泣き出すのかもしれないけれど、

「ロイド、お前は滅多に泣かないなあ。まだほんの一歳なんだから、もっと自由にしてて良いんだぞ。」

と話しかけてきたときはどきつとした。ほとんど彼の独り言だったけれども。

優しくに細められた目、その間に覗く灰色の虹彩がキラキラと光っている。

何となく、シリウスの頭をなでておいた。ありがとう。

あとは犬に変身したシリウスと一緒におひるねした。

「ロイド、僕が君のパパだよ！」

今更言わんでもわかります！

最近よく話しかけてくるなあ、と思ってたらそろそろ子供が話し始める歳なのか？

「あばー！」

「え、初めての言葉がパパでもなくママでもなくリンゴなのかい？
パパって言えたらリンゴジュースあげるよ！」

「ばばー」

涙目になった父がかわいそうになってきたので素直に申しませう。
決してリンゴジュースが飲みたいからではない、はず。

「リリー！ロイドがパパっていったよ！」

「ロイド、ママよー！」

「ままあー！」

本当に賢い子ね、と頭をなでられた。

暖かくてほっとした。

シリウスが躍起になって名前を言わせようとしてくるのがうざかったり、リーマスがえらいえらいってほめてくれたり、ピーターがその様子を遠巻きに見ている。

シリウスって言いづらいんだよ？

まあ、そんなこんなしているうちに弟が生まれた。

「名前はハリーだ！ハリー・ポッターに幸あれ！」

黒い髪に緑の目。まだ稲妻の走っていないつるつるとした額に手をのせてハリーをなでた。

フニフニとして気持ちがいいほっぺを優しくつつく。

「今日からロイドはお兄ちゃんだぞ！」

そんな日々がきつと幸せだったんだ。

聞こえる、父の、ジエームズの焦った声が。
ヴォルデモートが弟を狙っている。だから、

「ロイド、ロイドはしばらくリーマスと暮らしてね。ロイドは良い子だからきつと大丈夫さ。きつとまた、一緒に暮らせるはずだから。」

優しい父の声は今でも忘れられない。

あれから八年。

ハリーが「生き残った男の子」として一世を風靡して五年。

ロイド・ポッターがロイド・ルーピンになって八年。

『きつと』はやって来なかった。

俺と乱れる父の内心（前書き）

7・24 修正

俺と乱れる父の内心

おはよう、ロイド・ルーピン。

鏡を覗き込めば夕焼けのような鮮やかな赤毛に、アーモンド型の目の奥にはエメラルドを光に透かしたような見事な瞳が輝いている。俺は恐ろしく母親似だった。父の面影はそこに無い。

ハリーが狙われていると両親が知り、俺をリーマスのところへ預けると決めた翌朝（俺は子供だからわからないだろうと思われたのか、話し合いの席で普通に座らされていた）、母がハリーをつれて買い物に行っている間、父と二人きりになった。

「ロイド、僕はね、友人を疑うような事はしたくないんだ。でもね、僕は……」

口調は普段の父からは想像できないぐらいに静かで、憂いに満ちていた。

「ダンブルドアに忠誠の術を勧められたよ。人の中に秘密を封印して、その人がバラさない限り秘密がばれないようにする術さ。」

僕はシリウスを裏切らないし、シリウスも僕を裏切らないと思っ
てたさ。

でも、シリウスはなんで秘密の守人をピーターに変えるように勧めてきたんだろうか？

たしかに僕とシリウスの付き合いを見てた人からすれば、秘密の

守人はシリウスにするに違いはないって思うはずさ。だからこそ、ピーターを隠れ蓑にする意味があるのはよく分かってる……いや、そこが問題じゃないんだ。問題はシリウスがリーマスを疑っているってことなのさ。

なんでだろうね、僕たち四人はずっと一緒にやってきたのに、なんでお互いを疑わないといけないんだろうね。リーマスが裏切る訳が無いじゃないか。

だって、彼は確かにしたたか者だけど、僕やシリウスよりも善悪の判断がしっかりしている。

それに、なんといったって、ロイドの名付け親じゃないか！どうして疑う必要があるんだろう……

僕は逆にシリウスが信じられなくなってきたよ……

そんな泣きそうな顔をしないで、そう言えたらどんなに良い事だろう。

まだ舌足らずなしゃべり方しかできないこの口では俺の言いたい事は伝えられそうにも無かった。

「ばば、ピーター、だめ。」

「ロイドまでそんな事言うのかい？いや、シリウスの提案を受け入れるさ。こんな時代だからこそ皆で乗り切るんだ。それでダメだったら、どんなことしたって無駄なんじゃないかな。僕はそう思うんだよ。」

ダメだ、ピーターが裏切り者なんだ、

「ばば、」

「ロイド、パパを信じて？」

ぎゅっと抱きしめられた。俺はそれ以上口を開く事は出来なかった。父は何も語らずとも、俺の言いたい事はわかっているという風だった。

「杖を買いに行こうか。まだ早すぎるかもしれないけど、ずっと子供の杖選びをしたり、一緒に箒に乗ったりしたかったんだ。」

どうしてこのタイミングでそんな事言うんだろう。まるで、そんな時が来ないみたいない方がいいか。

幾本目かで美しい花が杖先から咲き誇って、店内を舞った。あたたかな空気が充満する。これだ……

「カエデにセストラルの尾。29センチ。最高傑作、良質で柔軟性に富む。あらゆる呪文に対して最適。」

「すごいじゃないかロイド！杖を選ぶにはちいさすぎるからダメだと思っただよ！」

「いやいや、ポッターさん。この子は間違いなく偉大な魔法使いになりますぞ。この杖は……」

オリバンダーさんと父の喜ぶ声が聞こえた。屈託の無い笑みを浮かべる父を見たのはこれで最後だったかもしれない。

「ダンブルドア！私にロイドを育てるなんて無理です！私が何者であるかご存知でしょう！？」

リーマスは訴えた。

俺が三歳になったばかり、父と母がヴォルデモートに殺されてしまつてすぐの頃だ。

俺はリーマスの家のソファで微睡んでいた。

「しかし、君はこの数ヶ月立派にこの子の世話をしてきたじやろう。リーマス、君が何者であるかはよく知つとる。子供好きで愉快な魔法使いじや。それに、君はこの子の名付け親じやろう？」

「それ以前に私は人狼です！もし一緒に暮らしていて、この子を噛んでしまったら、それこそジェームズとリリーに申し訳が立たない！この数ヶ月だって、満月の日はジェームズ達のところに戻るという約束で引き受けていたんです！」

「リーマス、落ち着くのじや。君以外に誰がロイドを育てられると云うのじや？それに、ポッター家の者がハリー以外に生き残つておつたとすると間違いなく騒がれるじやろう。それはこの子の為にはならぬ。この子がポッターを名乗れば、ハリーの兄として世間から見られる事になる……ロイドは、ロイドとして生きてほしいのじや。ジェームズの為にも、リリーの為にも。守ってやれるのはリーマス、君しかおらん。」

ダンブルドアが俺の髪を撫でた。

俺は目を開き、半月型のレンズ越しに瞳を覗く。

「まことに、リリーにそっくりじゃ。毎月、満月の頃に脱狼薬を届けさせよう。この子は賢い子じゃ。きつと、それで大丈夫じゃろう。」

月日が流れて、ただ今11歳。

「ようやく終わった。やっとできた・・・」

何枚も重なっているルーズリーの最後のページを書き終え、ペンを置いた。

五歳の頃から魔法使いの図書館に入り浸り、司書長の協力を得て魔法薬学やら何やらを学び、ようやく完成した本当の脱狼薬の研究。従来までは理性が保たれるだけだったが、俺の発見した薬なら一度服用すれば二度と人狼になる事は無い。完璧だ。

俺と優しい義理父の暮らし(前書き)

7・24 加筆修正

俺と優しい義理父の暮らし

リーマス、いや、父さんは定職に就くのが難しい。
なぜなら、狼人間だからだ。

「父さん！薬が届いたよ！」

毎月、満月の頃になると送られてくる薬の正体は教えられていないけれど脱狼薬だったことぐらい知っている。

添えられているカードには達筆な字で「砂糖を入れないように」と書かれている。

毎月同じメッセージを送ってくる生真面目さありがたい。

「机の上に置いといてくれ、すぐに昼食ができるよ。」

青白い顔でフライパンをひっくり返している父さんがぼそぼそと言った。

本当に具合が悪そうだ。

「父さんは座って、後は俺がやるよ。」

「いや、ロイド。このくらい平気だよ……代わりと言ってはなんだけど、洗濯物を取込んで来てくれないかな？」

「わかった！」

そう言つて、階段を駆け上がつて、ベランダではなく薬を運んできたフクロウの所に向かった。

俺の脱狼薬の研究を見してくれるのは、毎回脱狼薬を煎じてくれる人しかない。俺の推測が正しければ、スネイプ教授だ。

ルーズリーフをバインダーに綴じ、封筒に突っ込んで防水呪文を掛けた。

ちゃんと運んでくれよ。

五歳になつたばかり、父さんが日雇いの仕事をたまに見つけてきては唐突に出かける程度にしか仕事が無く、で食べる物も危うかつた頃のことだ。

「そろそろ仕事に行つてくるよ。」

「とうさん、ぼくマグルの『ないしょく』ってやつやるよ?」

俺は危機を覚えていた。父さんがこの二、三日何も食べていない事を知っている。

このままじゃ俺たち、餓死してしまう!

マグルの内職なら、杖をひとつりすれば大体片が付くし……

「ロイド!それだ!」

いきなりどうした。父さんは目を輝かせて俺を揺さぶった。

「魔法界で就職が無いなら、マグル界で働けば良いんだ！そうしたら私の病気について話さなくてすむ……………」

ああ、なんで今まで気付かなかったんだろう！

子供のように（いや、俺は実際子供なんだけどね。）よろこんで、父さんなんかは俺をもちあげて『たかいたかい』に回転をつけた洋な格好で振り回した。

「今日の帰り、マグル界で就活してくるよ！錯乱呪文使ったら一発じゃないか！だからロイドはまだ子供なんだからお留守番してていいんだよ！」

でもさ、家に居るだけだと退屈なんだよね。

というか、錯乱呪文って、キャラ違ってない？

杖はまだ父さんが預かったままだし、結構身体に引っ張られてるから言動が子供っぽいけどねえ。

「とうさん！図書館いきたい！」

「え、でも父さんは今から仕事だよ……………」

「ひとりでだいじょうぶ！」

「でもねえ、」

流石に渋る父さんは何やらぶつぶつ言っている。

そもそもこの子に文字教えたっけ？とか誘拐されたらどうしよう、でもあいつがいなくなっただけからは治安も良くなったしなあ、賢いから本だっただけたくさん読みたい気持ちはわかる、だがしかし、いや、

その前にこんなかわいい子が誘拐されない訳が無い、悪戯道具大量に仕込んでくかだとか。

あれ、途中から違う方向に進んでますよ、リーマスさん。

「お仕事がおわったらむかえにきてね！」

司書さんに俺の事をお願いするという結論で話がついた。なんだかんだ言っつて、父さんは俺に甘い。

ホグズミードの少し外れにある『ホグズミード魔法図書館』は魔法界で最大の規模を誇る。

なんでも、魔法界で発行された本ならば必ずあるとか、ないとか。ある、らしいけど広すぎて見つけるが容易でない。

魔法界の図書館は、イギリス国内でいえばホグワーツ内のものと、魔法省に併設している役人の為のものとホグズミードしか無い。

ホグワーツや魔法省の図書館は利用できる機会がすくないため、一般の魔法使いが利用するといえばここだ。

初めて訪れる魔法使いなら、この図書館の広さと荘厳さに圧倒されるであろう。

巨人が手を伸ばしても届きそうにないぐらいの高さをもつ本棚に、どこまであるかわからない奥行き。

上の方の本を見るには気が遠くなりそうなほど長いはしごを上らなければならぬ。

棚は生前と並んでいるのに、迷子になりそうだ。

「ロイド君、今日も勉強？えらいねえ。」

入り口の方は子供向けの低い本棚に小さい椅子が用意されていて、童話などが十分にそろっていた。

しかし、それらに目もくれず奥の方の魔法薬のコーナーで必死に羽ペンを動かす珍妙な五歳児の俺に、司書さんが周りに迷惑をかけない程度のぼそぼそ声で話しかけてきた。

「はい、薬学をべんきょうしておけばホグワーツでこわいモノ無しだつてきいたので。」

そんな事は誰からも聞いていないけれど、脱狼薬の研究だということと言う訳にはいかなかったので咄嗟に嘘をついた。

「薬学なら事務室にいる司書長が詳しいし、それに彼の友人に、以前ホグワーツで薬学の研究をしていた人がいた気がする。なんでもホグワーツの頃の同窓でお互いに薬学の点数を競い合ってたんだとか。司書長は子供好きだからきつと力になってくれる。」

「そうなんですか？」

「ああ、あんな強面だけどね。話しかけにくいなら紹介してあげようか。」

こう言うのを渡りに船っていうのかな。

「あ、はい。お願いします。」

「ロイド・ルーピン君だったけ？かわいいねえ。君のお父さんが目を

離さないように頼んでいた訳がわかるよ。」

俺は首を傾げておいた。

「ああ、君を僕に紹介したうちの司書にだよ。彼は人柄が良いから初対面の人からでもいるんなお願いごとをされる。最も、彼と君のお父さんは以前から知り合いだったようだけど。」

強面ででっかいマックス??司書長の名前??だが、話口調は司書より穏やかで気さくだった。

「うちの父さん、そんなことしてたんですね。」

「まあ、例のあの人がいなくなつてから随分と治安が良くなつたが、犯罪が絶えることは無いからね。心配し過ぎて丁度いいくらいだよ。で、薬学を学びたいんだっけ？」

僕は教えるのも好きで、司書とホグワーツの教授のどちらにしよるか迷つただけだね。新しい事を研究するのも好きだから、司書をやりつつ今でも個人的に研究していたりするよ.....

この図書館はあらゆる論文や書物が集まるから、僕みたいに個人で研究がしたくて司書になる人も結構いるんだ。司書ならば、どの論文がいつ入ったかすぐにわかるからね。

それに、教授の座を狙うとするとまたあいつと争わないといけないさそうだったし.....ところで、どこまで勉強したの?」

「えっと、今二年生の終わり頃です。」

まずは学校のカリキュラムを用いて勉強していくのが効率的だと思つたので、教科書を読む事から始めた。

不可解なところや興味の引いた部分があると、その度に立ち止まっ

て他の本を参照にしつつ勉強していたので、独学の割に進度が遅いとおもっていたんだけど、

「この図書館に来て二ヶ月だけ？早いね。もしかして家でも勉強してる？」

「はい。」

「そっか、なるほどね……」

マックスはにんまりと口角を上げ、悪戯っぽく瞳を輝かせると、

「君は中々骨があるようだ。頭も悪そうでは無い。私の指導はちょっと厳しいかもしれないけど、やってみるかね？」

「わざわざ時間を割いていただけののですか？」

「言っただろう？教えるのも好きだって。君が生徒になってくれれば、僕は司書だけでなく教師にもなれた事になる。こんな充実した人生は滅多に無いよ。」

「是非、よろしく願います！」

思いがけぬタイミングで先生が見つかった事に興奮し、俺はマックスと握手すると、その手をぶんぶん振り回してしまった。

マックスのしごきは本当に厳しかった。特に進度とレポート形式の宿題の面で。

一日一枚レポートを提出しなければならぬし、その量も多い。仕事の合間にちよくちよくやってきては（魔法薬の棚を担当しているのか、俺に話しかける機会を作るのはそう難しい事ではなかった）俺をテストしたし、気をつけておくべき事を簡潔に説明してくれるけれども、

いろんなところに立ち止まっては、いろんな本を読むという学習スタイルを取ってきた俺には早すぎると感じる程だった。

それに、マックスは薬学だけでなく主要な変身術や妖精の呪文、闇の魔術に対する防衛術など様々な課題を俺に課す。

薬学とは切り離せない縁をもつ薬草学は特にみっちり叩き込まれた。薬学だけでなく、さまざまな分野の知識を身につけた方がより理解が深まるそうさだ。

ペンを握りっぱなしの手に羽ペンはつらい。なにより、羽の部分が顔に当たるのが嫌なのだ。

ホグワーツに入学してから苦労するよ、と反対されつつもボールペンに持ち替えた。

それで負担は少し減ったけれど、昼夜を問わずに勉強してもついて行くのが大変だ。

平行して狼人間に関する研究の資料を読んだり、脱狼薬の原理を理解しようとしていたので疲労は溜まる一方だった。

「ロイド、君の学習能力の高さは認めるけど、ちよっとがんばり過ぎじゃないかな？」

マックスが苦笑まじりに言った。

勉強していて思ったが、俺は意外と完璧主義者だったらしい。そう指摘された。

「よくもまあ、百年前に書かれたような『生ける屍の水薬の多種多様な用い方』なんて本見つけてきたね。それとレポートこの部分。僕は基本こそ教えたけれど、こんな応用まで教えたかな．．．．．？というか君は新しいものを考えるのが好きなのかい？リーマスに聞いたけど夜もずつと勉強してるって言うじゃないか！熱中すると周りが見えなくなるのは、良く言えば集中力があるってことだけど．．．．．少しは休みなさい。もう少しでNEW Tレベルに到達することだし．．．．．」

いつの間にかマックスと父さんは友人になっていたらしい。後から、どちらかというと保育園の先生と保護者の関係だとマックスに聞かされた。

ホグワーツを卒業するには十分足り得るであろう知識をつけた後はもっぱら最新の研究について論議しあったり、それとなく脱狼薬に役に立ちそうな知識を聞き出そうと躍起になった。

最近研究がちつとも進まない。既存の脱狼薬の調合も複雑なのに、どうやったら完璧な脱狼薬になるんだ？

朝顔を洗っていても、晩ご飯を食べていてもその疑問だけが頭の中でぐるぐると回っていた。

父さんが人狼だとばれる可能性があるから脱狼薬に関する研究は持ちかける事が出来なかったけれど、マックスと既存の脱狼薬に関するの討論することでどうにか解決の糸口を見いだせない物かと試みてみたけれど、現状を打破するには至らなかった。

「ロイド、そろそろ寝なさい。」

父さんがいつもより厳しく言った。

「わかった。おやすみ父さん。」

こう言うときの父さんに反抗すると厳しく怒られるだけなので、素直に従う事にした。

明日の朝早く起きてやればいい……………

「ロイド、一生懸命に勉強するのはいいことだけど、身体を壊したら意味が無いんだよ。時々夜中に起きてこっそり勉強している事を父さんはちゃんと知っているんだからね。それに最近、拍車をかけて読書や勉強ばかりしているじゃないか……………なんでそんなに必死に勉強するんだい？」

父さんは心配そうに言った。

「楽しいからだよ。知識を得るのが好きなんだ。」

そう、笑って誤魔化する。

この時俺は八歳だった。この歳から、父さんからの誕生日プレゼントに本が追加された。

脱狼薬の研究が途中で行き詰まっている。その事に神経が立っているの、例えば時計の秒針の音などで、些細な事で目を覚ましてしまいう夜が続いていた。

何かが足りない。

人狼は人間に噛み付く事によってその仲間を増やす。

噛み付く事によって、魔法使いを人狼に変化させるウィルスをつつすのだ。

ウィルスは寄生した魔法使いから魔力を少量ながら奪う事ができる。満月の夜、昔から世界の魔力が増えるとされるこの夜にだけ変身するのは、寄生した魔法使いの魔力と満月の魔力を反応させているか

らだとされる。

既存の脱狼薬はこのウィルスが宿主の魔力を奪う事を阻害するためのもので、ウィルス人狼の理性を保つ事だけは成功させている。ウィルスが宿主から奪った魔力をなくさなければならぬので、満月の前の一週間は薬を飲み続けなければならぬ。

しかし、その処置は一時的な物にすぎず、ウィルスは実は魔力無しでも生きることができるので、寄生体から魔力を奪い取る事で再び魔力を持つようになる。

ウィルス自体は魔力を持たないのだから、マグルがこのウィルスを持つていても人狼になる事は無い。

魔法族にしか人狼がいないのはこの為だ。

こいつは中々のくせ者で、ウィルスが魔力を持つている状態だと殺す事はできない。この辺の詳しい事はわかっていないが、ウィルスが魔力を吸収するのは寄生体の中で確実に生きて行く為だろう、と言われている。

脱狼薬を飲んでいる期間に殺せば良いじゃないかと思うかもしれないが、ウィルスを殺す主成分となりそうな薬草と脱狼薬の相性が悪く、服用者が死に至る危険性がある。

どうすれば良いんだ。

「ロイド、新しい研究の資料が入ったから置いておくよ。」

そんな生活を繰り返す間に二年過ぎていた。

マックスの空き時間は俺との討論に費やされる。

仕事も忙しいだろうに、たくさん知識を授けてくれた。

首にならないだろうか？とこちらが不安になった程だ。

「いつもありがとうございます。」

「それにしたって、どうしてそんなに薬学ばかり必死こいて勉強するんだい？まあいい。話したくなければ話さなくなっただっていいんだ。君程の理想的な生徒を教えられて私は良かったと思っっているよ。僕にとっても良い息抜きだ．．．．もっとも、実習は出来なかつたけれど。」

「いえ、本当に対した事じゃないんです。俺も司書長さんに教えていただいて良かったと思っっていますから。」

そう言うと、マックスはにっこりと笑った。

「そうそう、この新しい研究なんだけどねもしかしたら君の薬に立つかもしれないよ。君はトリカブトの事についてやたら調べていたからね。これはトリカブトと他の薬草の反応のまとめなんだ。読んでおくと良いよ、なにせ最新だ。」

この為だけに来たらしい。
パラパラと読み始めると、脱狼薬うんぬんを抜きにして実に興味深かった。

このごろでは薬学を学ぶことが唯一の安心できる時間となっていた。逆に勉強してないと、焦りだとか、痒いところに手が届かない気持ちでいっぱいになるのだ．．．．

ページをめくる手が五十九ページで止まった。

これだ。

トリカブトを中和する薬草とその副作用。

俺は鞆をもつて、貸し出し手続きを済ませると薬草学のコーナーに走って行った。

静かな館内に靴音が響くことを全く気にしなかった。

「あつた、これだ。」

『リコリスとその毒の効力』という本を取り出す。

「リコリスは毒抜きする事によって、食す事が出来る。しかし、毒にこそすばらしい効能があるのだ……。」

しばらく著者がリコリスをほめたたえる文章が続く。

『リコリスの毒にユニコーン角の粉末を加え、十分間半時計周りにかき混ぜつづけた液体は大抵の毒薬を打ち消す。しかし、この液体も毒性ときわめて強い殺菌能力を示す。強い殺菌能力はリコリスの毒がユニコーンの角に働きかけて現れる物である。』

一年前に読んだ本だった……

そして、最新の研究の五十九ページには

『トリカブトとリコリスは互いにその毒を打ち消し合う。』

これだ。脱狼薬の服用者にリコリスの毒とユニコーンの粉末を混ぜた液体を飲ませれば……

後は比率や、服用者が死に至らない量などを計算すれば人狼の原因となるウィルスを殺す事が出来るかもしれない……

洗濯物をとりこんで下に降りると、すでに昼食は完成していた。

「良いところに来たね、よし、食べ始めようか。それと、今晚は出かけるから父さんがいない間は決して外に出ては行けないよ？」

満月前後は仕事を休まなければ行けないので、やはりマグル界でも定職につくことはしなかった。

でも、アルバイトはできるので実質フリーターのようなものだ。

父さんは夜のいない時間を夜勤だと思わせたいらしく、満月の晩以外でも時々出かけている。

アルバイトでも割のいい仕事を選んでいるようで、最近では食べ物に困る事も無くなったしつぎはぎだらけのローブではなくきちんとした物を着ている。

マグルのおかげで原作よりよっぽど裕福に暮らしている。

今宵は満月だ。

太陽がオレンジ色になった頃に父さんが出て行った。

ひまだなあ、なにしようか。

図書館で借りてきた本でも読んでいよう。

薬学の勉強は終わった、次は闇の魔術に対する防衛術でも極めようかと借りてきた本を広げ、居間のソファーにどっかりと腰掛ける。来るべきヴォルデモートの復活や、戦いのために一つでも多くの知識を蓄えておいて損は無いだろう……

読み進めるうちに、闇の魔術に対抗する為には闇の魔術そのものをしっかりと理解しておく必要があるのではないかと疑い始めたら、ホラー映画さながら、家の扉を叩く音がした。

「ルーピン！今すぐ開ける！」

扉を開けるとでっかいコウモリがそこにいた。

俺と優しい義理父の暮らし（後書き）

原作に突入したら主要なシーンを省く部分が出てきますので、

「ここはよみたい!」というシーンがありましたら、

リクエストお願いします。

俺と完成した脱狼薬の研究(前書き)

7・24 加筆修正

俺と完成した脱狼薬の研究

セブルス・スネイプの瞳が見開かれた。

昼にルーピンのもとに脱狼薬を運んだはずのフクロウがスイーツと部屋に入ってきたかと思うと、何やら分厚い封筒を机の上に叩き付けた。

なんだこれは、と封筒を開けば出てきたのはマグルの使うようなプラスチック製の物で、^{バインダー}その間に一センチ程の分厚さの紙が挟まっている。

そして、タイトルは『脱狼薬の研究の完成』と書かれていた。

なに、この人怖い。

真っ黒な服に真っ黒なローブ。

真っ暗な瞳に、重油にひたしたような黒い髪が油っこく覆いかぶさっていた。

「あの、どちら様でしょうか。父は外出中ですが……」

ロイドはこの男が早く立ち去らないものかとソワソワした。

男はロイドを見ると一瞬固まったように見えたがすぐに話し始めた。

「我輩はホグワーツで教員をしているセブルス・スネイプだ。聞くが、これに見覚えはあるか？」

ロイドが昼間に送ったバインダーが差し出された。

「いいえ、ありません。」

最初からロイドは脱狼薬の研究について知らぬフリをすると決めていた。

この研究を元に誰か権威のある人（そういった点でホグワーツの教授であるスネイプは実に適任だった）がどこか自分の知らないところで発表してくれればいいと心底思っていた。

スネイプはロイドの返答に眉間にしわを寄せたがすぐに表情を元の仏頂面にもどすと、

「本人はこう言っておりますがな、校長。」

「まあ、折角じゃ。上がらせてもらおうとしよう。良いかな、ロイド？」

後ろからひょっこりと、ダンブルドアが顔を見せた。

「お茶です。すみません、お茶請けが無くて。」

ロイドはソファアーに腰を下ろしていた二人に最低限のもてなしをしようとして、まずお茶を入れる事にした。

「いいのじゃよ、突然押し掛けてきたのはわしらなのじゃから。ところで、お茶を入れるところを見させてもらったのじゃが、君はもう無言呪文が使えるのかね？」

ダンブルドアは穏やか言った。

「あ、はい。長い呪文が上手く言えないときに杖を持ったので．．．
．．．呪文を唱えずに杖を振り回していたら使えるようになってい
ました。」

自分の手の中にある杖を弄びつつ、二人の前のソファーに腰を下ろ
した。

幼少期から呪文の練習をしていたが、呂律の回らない舌で複雑な呪
文の発音の練習をするより無言呪文の練習をした方がよっぽど効率
的で、そしてその考えは間違っていないかったとロイドは思っていた。

「校長、やはりこやつが書いたにちがいないでしょう。そちらのソ
ファーの横に置いてある本、『閉心術とその心得』はNEWTRレベ
ルを軽く越えておりますぞ。」

スネイプは訝しげに言った。

「読むだけで、理解はできませんよ?」

一応反論するロイドに、

「うむ、わしもそう思っていたところじゃ。普通の十一歳の子供が
その本を読むには、少々度がすぎておる。それに『最も強力な魔法
薬』は、たしかホグワーツでは禁書になっておったはずじゃ。」

ダンブルドアがロイドの目を見透かす。

「もう一度聞くがね、『脱狼薬の研究の完成』を書いたのは君じゃ

るう?」

ロイドは自分の負けを悟った。

「君は非常に賢いようじゃな。君の持っている本の書名だけで判断した訳ではないぞ。おそらく君は自分の名前が世に出ることを恐れたのじゃろう。とても懸念な判断じゃ。君の歳で、これほどの物を書いたとすると、名声だけでなく周囲の妬みや反発を招くのは避けられぬことじゃ……………」

自分の考えていた事を当てられてドキツとした。

「はい、たしかにそれを書いたのは俺です。懸念していたのはそれだけじゃなくて、俺の名前が出る事によって父さんが人狼であったということが広まる方が恐ろしいのです。何せ、俺にも言わずに隠し続けてきたことですから……………」

なにせ、勉強を教えてくれていたマックスにも言わなかったぐらいだ。

ふむ、とダンブルドアがうなった。

「やはり、よく考えていたようじゃの。」

「これほどの論文をいつから書き始めたのですかな?」

「五歳、いえ、書き始めたのは六歳からです。薬学を学び始めたのが五歳でしたので。」

「では、五歳のときにはすでにルーピンが人狼であると気付いていたのかね?」

スネイプの声色は先ほどまでの冷静さを欠いていた。

「ええ、たまたま。それと、俺も一応ルーピンなんですけど．．．
．．．」

ロイドがそう言うと、スネイプは一瞬怯んだが、「よからう。」と返答した。

「しかし、よく完成させたのう。ダモクレスも君より以前から治療薬を完成させようとしておったのじゃが．．．．ダモクレスは最新の研究に目を通しておらんかったようじゃの。君が気付かんかったら完成にあと数年はかかっていたじゃろう。この研究のおかげで救われるのは君の父君だけではないぞ。」

「しかし、それはまだ実証されていません。完成させたというよりは、発見したと言った方が適切だと思います。もしトリカブトを研究していた人が脱狼薬や人狼に非常に詳しくければ、間違いなく気付いた事でしょうし．．．．俺はリコリスとトリカブトが丁度良く中和するの量を計算するぐらいしかやってません。そもそも、その研究に間違いは無いでしょうか？研究費などが無かったので実験などができなくて、あくまでそれはただの理論にすぎないのです．．．
．．．あと、俺以外誰もチェックしていないので、その点が心配だったのです。」

スネイプが??スネイプだけでなく一般の人々にも当てはまるだろうが、??傲慢でいばりくさった人間を酷く嫌っている事をロイドは知っていたので、あくまで下手に出た。

脱狼薬の存在を知る者はまだ少ない。

ここ十年で開発された薬の為、ホグワーツの授業でも名前に触れる

程度でその複雑な調査や理論について学ぶ事は無かったし既卒生では全く知らないの方が大半なのではないだろうか。

そもそも、人狼の習性や襲われたときの対処法、見分け方を教えこそするが、人狼に至る細かなプロセスなどもホグワーツでは教えられないのだ。

知っている物は研究しているごく一部の者達だろう。

「あのリコリスとユニコーンの角を煎じた液体とトリカブトの毒性の打ち消しについて聞きたい。」

「ええと、リコリスの毒がユニコーンの角に働きかけて強い殺菌成分をしめします。」

スネイプが小さく頷いた。

「トリカブトとリコリスの毒は中和されて、服用者が死に至る事はありませんが、あらかじめ強い殺菌作用を持ったユニコーンの角の粉末が中和される事は無いので、殺菌作用は持続する、と言った風です。この殺菌作用は運良く、人狼ウイルスに対して効果をもつ種類の物でした。」

「ふむ、何の問題ありませんな。論文自体にも問題は無かった。間違はなく、このルーピンが書いたものでしょう。」

スネイプはつぶやいた。

「さて、わしらは明日の昼間にまた来るとしよう。君のすばらしい研究の成果をリーマスに報告しなくてはなるまいて。」

ダンブルドアが立ち上がると、スネイプもそれにならったが、

「出来れば父には俺が開発したとは言わずに、ただ、治療法がみつかったとだけ言ってもらえませんか？俺に知られずに人狼ではなくなった、という方が父が報われると思うんです。」

なにより図書館に通い始めたのが、第一にこの研究のためだと父に知られるのが少々気恥ずかしかった。

「ふむ、君がそうしたいというならば、そうした方が良いのかもしれんの。」

ダンブルドアが微笑んだ。

玄関の扉を開けると、家の周囲を取り囲む森は非常に静かで、煌々と光る満月が静寂に神秘性を与えている。

「では、明日また会おう。おやすみ、ロイド。」

姿くらましのバシツという音が森に訝した。

俺と歓喜する義父の秘密

「本当ですか!？」

父さんの叫ぶ声で目を覚ました。

脱狼薬の研究を終えた最初の夜だったので、徐々に深く眠りにつけたなと溜息を吐く。

時計を見れば、既に正午を過ぎていた。

あの二人が来るというのに寝過ごしてしまったこと気付いて、あわてて支度し始めた。

今日に限って寝癖が酷く、治すのに苦勞する。髪の毛が長くなってきたのでそろそろ切りたい。

ぼさぼさのロングは見苦しいな。

脱狼薬のことばかり考えてたから、身だしなみの事を全く気にしなかったからなあ。

父さんも何も言わないし。

やっとの事で居間に降りて行けば、ダンブルドアとスネイプが昨日と同じソファアに座って、父さんと話していた。

「こんにちは。」

「おお、ロイド、遅かったのぉ。昨日は遅くにすまんかった。よく眠れたかね?」

「はい、ダンブルドア先生。」

「ロイドがこんなに遅いなんて珍しいね。ダンブルドア先生は昨日もいらっしやったのですか?」

「ふむ。セブルスも一緒にお邪魔したんじゃが、君がおらんという事をすっかり忘れておった。ロイドが美味しい紅茶を入れてくれたよ。階段の前で突っ立ってないで、座ったらどうかね？」

「あ、はい。そうします。」

父さんの横に座って、顔を上げるれば不意にスネイクと目がかち合ったが、すぐに逸らされた。

思いつきり脱狼薬の話をするだろうに、父さんは俺がいていいのだろうか？

「セブルスも昨日は遅くにすまなかったね。それで、薬はいつ頃にできそうだい？」

「大体一週間後ですな。その期間はこれまで飲んでいたあれを飲む必要がある。」

「しかし、今さっきの説明からするとだ。あれの中和剤を別に飲んでからウイルスを殺す薬を飲めば大丈夫だったんじゃないかい？」

「ベゾール石などでも解毒する事が出来るが、ベゾール石などを使うとウイルスを殺す事の出来る薬までも中和されてしまうのである。トリカブトを中和し、かつある種の殺菌効果がある物でなければならなかったのだ。これまではリコリスが中和すると考えられていなかったゆえに、治す事は不可能とされていた。」

なるほど、と父さんがため息をつく。

「これが今日の分だ。砂糖は入れないように。」

いつもの薬の入った瓶が机に置かれる。
目線は脱狼薬に注がれていた。

「ありがとうセブルス。」

にこやかな父さんに、「かまわん。」とスネイプが小さく漏らした。
その様子にダンブルドアがフォツフォツと微笑み、

「ところでロイドは今年ホグワーツに入学じゃな。」

と、明るい口調で言った。

「ええ、本当に大きくなるのは早いです。この子は昔からすぎる程
に利口でしたから、手がかかりませんでしたけど。」

父さんが俺の髪をなでた。

「それはそれは、ホグワーツに入ってからが楽しみじゃの。四ヶ月
後ぐらいに入学許可書が届くじやろうから、楽しみに待つておるが
良いぞ。それでは、そろそろ帰るとするかろう。ロイドも遅い朝食
を食べなくてはなるまいて。」

そう言えば起きてから何も飲んでいなかったので、喉がからからだ
った。

「本日はありがとうございました。」

「ふむ。行こう、セブルス。」

「ロイド、今日はいつにも増して遅かったね。あまりにぐっすり寝ているものだから、起こさなかったよ。昨日も遅く寝たのかい？」

「え、いや。ダンプルドア先生とスネイプ先生が帰った後、すぐに寝たよ。」

彼らが訪れたのが七時くらいだったから、早いぐらいだ。

朝食はトーストにハム、目玉焼きだった。

紅茶ではなく、コーヒーを飲む。うん、甘い。

「そうか。父さんね、もしかしたら就職できるかもしれないんだ。」

「え、いつも働いてるじゃない。」

それも、俺の事を気づかって、ご飯の時間などは仕事を入れないように、あえて深夜の仕事を入れていた事も少くない。

「いつもはアルバイトだからね．．．．．ちゃんとした仕事にだよ。病気が治るかもしれないんだ！」

「おめでとう父さん！今日は森でイノシシを狩ってきて、久々にごちそうにしよう！俺が行ってくるよ。」

「良いね！賛成だ．．．．．ロイド、ありがとう。でも、危ないから一人で行っちゃだめだよ。」

父さんは昨日が満月であった事を感じさせない、今までで一番晴れやかな笑顔だった。

図書館で本を借りるのには杖が必要だ。

杖が貸し出しカード代わりになる。

なので、初めて図書館に行った時に父さんから杖をもらった。

生みの父とオリバンダーの店で買った杖だ。

六歳になった頃から、時たま買い置きが無く食べ物に困ると、森で調達するのに参加していた。

図体がでかい割に運動能力が高い動物なので捕まえるのが難しく、必要にかられない最近ではあまり食べなくなっていたが……

父さんは働きに出てる時間が多いし、そういった時間が親子のコミュニケーションの貴重な時間になっていたように思える。

俺と歓喜する義父の秘密・2

リーマスは不意に溜息をついた。

ロイドはそんなリーマスの様子に少し首を傾げたが、いつものように笑顔で誤魔化す。

そして、いつものように暖炉から図書館に飛んでった息子を見送った。

「ルーピン。」

「やあ、セブルス。君に私の病気を治してもらえるなんて、昔の事を考えたら想像もつかなかったよ。」

玄関を勝手に開けて入ってきたスネイプに嫌な顔一つもせずに行った。

「脱狼薬も治療薬も我輩が開発した訳ではない。」

「そうなのかい？」

「我輩が貴様の為にわざわざそのような事をするとおもつかね？」

「たしかに、そうかもしれないね。でも、私の為に八年間も脱狼薬を作ってくれたじゃないか。」

あくまで感謝の姿勢をくずさないリーマスを鼻でフンとあしらった。

「ところで誰が開発したんだい？」

リーマスはスナイプに尋ねた。

「匿名だ。」

不自然な程短く切り捨てると、テーブルの上に二つの小瓶を置く。

「飲むのなら、とつとと飲め。」

前にも説明したとおり、この薬はまだ発表されていない。よって、この薬を飲むのは貴様が最初という事だ。

理論は問題ないが、人狼という特異な性質上、モルモットで実験する事も出来ぬ。」

スナイプの眉間にしわが寄ったのを、リーマスは見逃さない。

「気が狂つてるとしか言いようが無い。」

スナイプがしみじみと言った。

「このような未だ実証されていない薬を、まだ年端もいかぬ子供が居る奴が飲むなんてな。一步でも違えれば、死ぬかもしれぬのだぞ。」

初めてリーマスがスナイプから視線を外す。

「覚悟なんて出来ているさ。脱狼薬も一日飲み忘れれば、効果を発揮しないしね。ロイドに危険がおよぶ可能性の芽を摘み取る事の方が急務だ。ロイドに噛み付いてしまったらと思うと……」

の八年間そう思わない日は無かった。それに、ロイドが折角見つけてくれたんだ……」

「知っていたのか？」

今度はスネイプがリーマスを見る番だった。

「君はダンブルドアよりも後に来たからね。最も、ダンブルドアがそう仕組んだのかもしれないが。」

あの子にそんなに早くに気付かれていようとは、思いもしなかったよ。そして、気付いている事を私に悟らせようともしなかった。

私は人狼だとばれた事を嘆くより、人狼である私を、ロイドが受け入れてくれていた事に動揺したよ。

純粹に魔法界で育った子供は皆、狼人間というものを忌々しく思っているからね。無理も無いけど。」

魔法界の者なら口にこそ出さないが、ヴォルデモートの名を知っている。

それと同じくらい、あの暗黒の時代において魔法界で子供を持つ親は皆、フェンリール・グレイバックという残忍な狼人間を恐れていた。

こいつはヴォルデモートに逆らった親の子供を狙って噛み付く。

人狼と化した子供を魔法使いを憎むように育て上げ、仲間を増やすことを使命だと考えていた。

これらが、現在人狼が嫌煙される冠たる理由だった。

最も、このような理由が無ければ人狼に関する研究は進まなかっただろう。

「私で実証されれば、多くの人が助かる事になる。ロイドの???私はいくらまでロイドが何故必死に勉強するのか知らなかったよ???努

力も報われる事になる。」

リーマスの顔には笑みが浮かんだり、消えたりしていた。

「しかし、四六時中勉強していたといっていたな？不自然には思わなかったのかね？」

「知識を得るのが好きだとだけ言われたよ。出来る限り好きなようにさせてやろうと思って、深く追究しなかったけどね。しかし、実際気を使われていたのは私かもしれないね。この一週間は図書館に入り浸らないで、本だけ借りて、一時間もしないうちに帰ってくるよ。さて、ロイドが帰ってくる前に飲むとしようか。」

薬瓶に手を伸ばした、リーマスにスナイプが尋ねた。

「遺された者はどうなるんだ？」

スナイプの問いかけにリーマスは答えなかった。

視線がテーブルに固定される。

脱狼薬は、例え理性を保つ事を可能にさせようとも、満月までのカウントダウンと何ら変わりなく、またあの異形に成り果ててしまうのかと思うと、見ているだけで憂鬱になる物だった。

しかし、今は違う。

たった一杯。この脱狼薬を飲み終えれば、二度と人狼になる事は無い。

この一週間、苦みなんて気にならなかった。

いつもとは違う、脱狼薬の横に置かれた焦げ茶色の薬を見つめて、ぐいっと飲み干す。

続けて、焦げ茶色の薬を飲む。

身体の中で、熱く、何か弾けたような気がした。

俺と大きな司書長の対話

お昼の時間帯で館内も疎らになった頃、
煙突飛行で図書館に着いたロイドは、返却手続きをする前に奥の戸
棚へと足を向けた。

広すぎるこの図書館では当然、需要のすくない専門書や闇の魔術に
関する本は奥の方に保管されている。

手前には主婦や低年齢層に人気な小説や絵本、家庭雑貨などの雑誌
が置かれている。

それだけでも、蔵書の数には半端ない物だから、屋内だというのに、
ロイドは毎回、薬学のコーナーに行くのに五分程かけていた。

今日はそこからさらに奥にある戸棚に用がある。

次に勉強するなら、当然「闇の魔術に対する防衛術」だ。

なぜ防衛術が??薬学より需要が高いように思える防衛術が??薬
学より奥の戸棚にあるのか?

それは、その本質を問うには闇の魔術と切っても切り離せない縁を
持つという事を示唆していた。

閲覧禁止に指定されていないとはいえ、この図書館は公立だ。

お役所が闇の魔術に関する本を一般人が盛んに見て、喜ぶ訳が無い。

「まさかホーククラックスの資料がこんなに簡単に見つかるなんてな

」

不意に出てしまった言葉に、周りに人のいない事を資料を探す前に
念入りに確認しておいてよかったとロイドは思った。

何故トム・リドルがわざわざスラグホーンにホーククラックスの質問
をしたのか。

ロイドはそれが知りたかった。

あいつがあの時質問していなければ、もしかしたらハリー達に分霊箱の秘密を握られ無かったかもしれない。

所変わって事務室。

ホークラックスに関する資料は貸りなかった。

貸し出し記録という、証拠に残るからだ。

「すみません、マックスさんいらっしやいますか？」

「おお、ここだ。」

よう、とマックスが手を挙げる。

「どうした、最近は来てもすぐに帰ってるけど。」

「今まで調べてた奴が終わったんで、一休みって感じですよ。」

「そうか、お前の調べ物長かったからなあ。お疲れ様。」

マックスが言った。そして、事務机の引き出しを開けて、何やら探り始める。

マックスの体格には（身長は二メートル近くあるのではないだろうか？）その机はあまりにも小さく見えた。

「じゃあ、ここに来たのは質問じゃないって事だね。最近は質問を受ける事も減っていたけど。どうしたんだい？」

「ええ、後数ヶ月でホグワーツに入学なので、薬学以外を勉強しようと思っまして。」

「なるほどね。薬学の知識だけに偏ってしまっているから、総合的に見れば正解だけど、寂しいね。薬学について討論してくれる人はあまりいないのに。」

「すみません。」

ロイドは申し訳なさそうに言った。

「いや、ロイド君がホグワーツに行ったらさらに寂しくなるだけだから、今のうちに慣れておかないと。ところで、どこの寮が良いんだい？」

「あー、考え中です。たぶんレイブンクローなんかがあつてと思うんですけどね。マックスさんはどこの寮だったんですか？」

マックスは随分前からロイドに「マックスでいい」と繰り返していたのだが、この少年から敬称を取り除かせる事は出来なかった。

「たしかに、レイブンクロー向きだね君は。新しいもの大好きみたいだし。僕はスリザリンだよ。見た目通り。」

「甚だ意外ですね。」

ロイドはこんな優しい人のどこに目的を達成する為に手段を選ばない狡猾さがあるのだろうか、未だ引き出しを探るマックスを凝視した。

そんなロイドの視線に気付いたのか、

「昔はね、マッドだったんだよ。」

「へ？」

「君みたいに幼い頃から薬学にとっぷり漬かっているね。見境なく実験したものだよ……それに、家が純血主義で金だけは有り余っていた……お、やっと見つけた。」

マックスは手の平サイズの包みをロイドに差し出した。

「いや、前からあげようと思ってたんだけどね。開けてみて。」

細い紐を引っ張ると、小包がパツカリと開いた。

「これって！」

「ベゾアール石だよ。」

事も無げに言うマックス。

「こんな高価な物受け取れません！」

ベゾアール石は大抵の解毒剤の主成分となるので非常に需要が高い。しかし、ヤギの腸から一つしか取り出す事が出来ないので、あまり市場に供給されず直接療養機関にまわされる。

研究者であっても、個人が手にするのは容易い事ではない。

「いいんだよ。入学祝いでも思ってくれ。君は毒薬とかそんな事はばかり調べていたから、いずれ役に立つんじゃないかと思ったんだ。」

「え、でも……いえ、ありがとうございます。」

「受け取ってくれたなら良いんだ。……おや？これはダンブルドア先生。お久しぶりです。」

「久しぶりじゃのう、マックス。」

なんでこうも、ダンブルドアとの接触率が多いのだろうか。全然うれしくない、と思っているロイドに、

「緊急事態じゃ。すぐにロイドの家に向かわなくてはならぬ。丁度いい、マックスも一緒に来てはくれんかね？」

「緊急事態ですか？」

素っ頓狂にロイドが聞く。

「緊急事態？何故ロイドの家で？それに私が行く意味は……？」

「それも含めて、ロイド、落ち着いて聞くのじゃ。」

ダンブルドアは一拍置いてから言った。

「リーマスが倒れた。」

「へ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0638v/>

ハリー・ポッターと非力な兄君の人生

2011年7月27日22時18分発行